

# 総合表現プログラム 「総合子どもカーニバル」の実践活動について

坂井 康子・辻 誠

仲山 正志・相澤 亮太郎

## A Study of Practical Activities of Cross – Sectoral Expression “Sogo Kodomo Carnival”

SAKAI Yasuko, TSUJI Makoto, NAKAYAMA Masashi and AIZAWA Ryotaro

**Abstract:** The Course of Study for Kindergarten/The Guidelines for Nursery care at Day nursery decomposes the field “Expression” into distinct sector (formative art/music/body expression/linguistic expression). The description of the Course of Study for Kindergarten improve edition as of H 20 encourages teachers to put emphasis on expressions across these sector, given the less specialized nature of children’s expression. Most of the teacher training courses, however, currently do not cover such cross-sectoral expression. To address this problem, we have carried out for 13 years a series of courses to train next-generation teachers who understand the significance and methodology of cross-sectoral expression. Achievements of these courses have been presented to the local children and parents in the program “Sogo Kodomo Carnival”. This program has been organized by students themselves, and can hence be considered as a form of active learning called program-based learning (PBL). We assessed the learning experience of students by interviewing participated students and supervising faculty members. This revealed that students acquired, through brainstorming and problem-solving, deep understanding of the significance and methodology of cross-sectoral expression. Our analyses thus demonstrate that our program “Sogo Kodomo Carnival” effectively trained the next-generation educators for cross-sectoral expression.

**Key Words:** Cross-sectoral Expression, Program-Based Learning, Training the Next Generation of Educators

**要旨：**『幼稚園教育要領』・『保育所保育指針』の領域「表現」は、造形・音楽・身体・言語表現の分野を統合した領域である。平成 20 年『改訂幼稚園教育要領解説』において、子どもには未分化な表現特性があることをふまえ、教員に分野を横断した総合表現を重視することを求める記述がある。しかし、教員養成の現場では、授業内容として広く実施されるには至っていない。

そこで、甲南女子大学総合子ども学科では、分野横断的な総合表現の内容と意義を理解し、指導できる教員の育成をめざした授業を実施してきた。その学習成果を総合表現プログラム「総合子どもカーニバル」として、13 年にわたり地域の園の子どもと保護者に対して発表してきた。

プログラムの企画、運営を学生自身が主体的に担っており、この実践活動を、アクティブラーニングの学習形態の一つである PBL (Program-Based Learning) 課題解決型学習とみなすことができる。PBL という観点から、参加した学生に対するアンケートの記述と質的分析、さらに教員による観察を行なった。結果、学生たちが意見を交換、集約しながら協働して問題解決していく過程で、総合表現活動の内容と意義を理解し、教育者としての視点を持てたことが明らかになった。したがって、この実践活動は分野横断的な総合表現活動を指導できる教員の養成に効果があると確認できた。

**キーワード：**総合表現、課題解決型学習、教員養成

## 1 はじめに

本稿は『幼稚園教育要領』・『保育所保育指針』の領域「表現」の内容に則した総合表現プログラム「総合子どもカーニバル」の開発の経緯、実践活動のアンケート結果について分析、考察を加え、教育的な意義と効果について明らかにするものである。

平成元年の『幼稚園教育要領』および『保育所保育指針』の改定により、領域「表現」となって30年が経つ。改定以前は、表現領域が、造形と音楽分野に分かれており、分野間の関連性はほとんど取り上げられなかった。改定後も、長らく分野間の関連性について明確に触れた公的文書の記述はなく、その後、平成20年の『改定幼稚園教育要領解説』において、子どもには、絵を描きながらその内容に関連したイメージを言葉や動作で表現するなど、未分化な表現特性があり、教員は分化した表現分野の枠にこだわらない姿勢をもつべき、と指摘され<sup>1)</sup>、分野間の関連性が重視されるようになった。

これら教育観の転換から、近年ようやく表現分野を横断した総合表現の重要性が研究者間で共通認識となってきた。保育や教育の現場でも総合表現の実践が増えており、さらなる発展が予想される。これら現況を考えると、生活発表会や学芸会等の総合表現について、その意義を理解し指導できる教員の育成を目指した実践的学習の教育的意義は高まっていると考えられる。

一方で、教員養成校において、総合表現を教える授業が広く実施されているとは言い難い。これまで総合子ども学科では、総合表現の内容や意義を理解し、指導できる教員の養成をめざした授業を実施してきた。さらにその学習成果を13年にわたり、学内の「芦原講堂」において、総合表現プログラム「総合子どもカーニバル」として発表してきた。

本プログラムでは学生が主体的に企画、運営を担っており、この活動を文部科学省が推奨するアクティブラーニングの一環であるPBL(Project-Based Learning, 以下PBL)課題解決型学習と位置づけることができる。PBLの観点から、学生がどのようにテーマ決定し、脚本作成、演出を検討していったかという過程と、その過程における学びの実相を明らかにしたい。また、学びの実相を質的に分析し、捉える手法として、比較的小規模なデータから活動における潜在的意味を見出し、理論記述を抽出するSCAT(Step for Cording and Theorization, 以下SCAT)分析が適切であると判断し採用する。

## 2 「総合子どもカーニバル」の開発

総合子どもカーニバルは、本学科の学生たちが将来、保育・教育の現場で生活発表会や音楽発表会、学芸会等の舞台作りに携わることを念頭に置き、そのための経験や学びの場として位置づけられ、発展してきた。毎年12月に、甲南女子大学の芦原講堂(定員1784席の音楽ホール)において開催されるプログラムは、本学科にとっても、近隣の子どもたちにとっても恒例の年中行事として定着しつつある(写真1, 2)。

本章では、総合子どもカーニバルにおける学びの特徴を確認するために、まずは、第1回以降のプログラム構成とその変遷を簡単に紹介したい(表1)。その上で、学生が中心となって取り組む脚本作りの過程を取り上げ、その学びの実相をPBLの観点から描き出してみる。

総合子どもカーニバル第1回(2007年)では、学生がグループごとに演奏やダンス等、各々の得意な分野に特化して練習を重ね、順番に発表する形式であった。また本学教員や近隣の保育園の子どもたちによる演目も組み込まれ、個別に準備してきた内容を持ち寄る形で成立したプログラムであった。第2回(2008年)では、第一部の冒頭に「スイミー」から題材を得た演劇が設定された。演劇には、合奏やダンスが部分的に組み込まれており、音楽劇をベースとするプログラムのプロトタイプであったと言える。その後、第3回(2009年)では「オズの魔法使い」、第4回では「不思議の国のアリス」を題材とした演劇が冒頭に設定され、第二部では従来同様に個別の演目発表が行われている。大きな変化が生じたのは、第5回(2011年)である。身体表現(ダンス)や音楽表現(合唱・合奏)、造形表現(大道具・小道具・衣装等)、言語表現(演劇台本)等が全て組み込まれる一つの総合表現プログラムとして、総合子どもカーニバルが構成され、マネジメントされるようになった。また、来場してく

れる近隣保育園が増えて近隣園による演目はなくなり、子どもたちに劇中で一緒に歌ってもらったりクイズに答えたりしてもらう参加型の劇として上演されるようになった。

現在（2019年度は第13回）の総合子どもカーニバルを含めて、筆者が考える大きな特徴を以下2点挙げたい。1点目は、開演から終演まで、一つの作品として成立させるためには、全体を統合して構成する脚本や演出の役割が重要であるという点である。2点目は、第1回開催時より、学生が実行委員会を形成している点である。例年12月に実施される総合子どもカーニバルに向けて、前期の段階から準備を進め、企画からマネジメントに至るまで、多くの部分を学生自身が担っている。筆者は、単位取得という目的を超えて「カーニバルを成功させる」「子どもたちのために良いプログラムを作りたい」という目標に向かって準備を進め、困難を乗り越えて成長していく学生集団に関わってきた者の一人として、総合子どもカーニバルを通じた学びが、他の授業における学びと大きく異なる点に大きな関心を抱きながら、その活動を支援してきた。以下、「総合子どもカーニバル」の実践を、PBLと関連づけて論じてみたい。

PBLは、「課題解決型学習」や「問題解決学習」等と訳されており、昨今では、新しい学習指導要領の重要な柱の一つとなっているアクティブラーニングを基礎とした学習形態の一つとしても注目を集めている。総合子どもカーニバルに即して説明するならば、以下のような枠組みと学びが設定されていると言える。

- ①子どもたちを招待し、音楽劇を上演することが最終的な目標として設定されている。
- ②有志の実行委員が20～30名程度集まり、授業（単位取得）の枠を超えて、準備を進める中心的な組織を構成し、企画やマネジメントを担う。
- ③作品は与えられたものではなく、テーマやメッセージ、脚本や演出に至るまで、学生たちが主体的に考えて構成するため、成功に向けた強い動機を保持することができる。
- ④準備を進める中で多様な課題や問題が発生し、多くの制約の中で問題を解決する必要に迫られる。
- ⑤前年度に1年生として参加した経験から、翌年は2年生実行委員として改善策を持って提案し実行することができる。

以下では作品作りの立ち上げ期に焦点を当てながら、学生たちの学びの実相を紹介したい。

## 2-1. 作品の土台作り

総合子どもカーニバルは、前年度の総合子どもカーニバルが終了した直後に、参加した1年生への振り返りアンケートを用いて実行委員希望者を募るところから、次年度のプロジェクトがスタートする。その際、どのような役割を担いたいかについても希望を書かせており、例年20～30名が実行委員への参加希望を申し出る。新年度がスタートする4月以降（2019年度は前年度末の段階で何度か集まりを持った）、12月の本番まで、週に1回程度のミーティングを行う。ミーティングでは、まず自己紹介や、本人の希望に基づいた役割分担等を確定し、その後、どのような作品を作っていくのかという話し合いに入っていく。

ミーティングの進行については実行委員の学生リーダーが担い、教員は必要最低限のアドバイスや説明を行うようにしている。コンセプト、テーマ、タイトル、キャッチコピー、メッセージ性などについて、ブレインストーミング的な話し合いと意見集約が重ねられる。実行委員会から脚本を担当する学生に対して、先に何らかのイ



写真1,2 総合子どもカーニバルのステージ

メージの提示が求められることもあるが、そこで一方的に決まることはなく、実行委員全体での合意形成に1ヶ月以上の時間をかけることが一般的である。作品の枠組みを固めていく作業と同時に、脚本の作成が始められ、配役が決まり、さらに舞台美術、衣装、音楽等の企画案も各担当学生からの提案が求められていく。作品の大枠と細部が同時並行かつ再帰的に検討されながら固まっていく点は、必ずしも効率的な運営であるとは言えないものの、実行委員全体でイメージを共有することで「自分たちの作品である」「自分たちが作り上げていく」という

表1 第13回までの「総合子どもカーニバル」の内容

回数	実施年	内容やタイトル
第1回	2007	1年生によるダンス, 2年生による楽器演奏(和太鼓を含む), 教員による演奏, 近隣園の園児による演目
第2回	2008	1年生によるダンス, 2年生による楽器演奏(和太鼓を含む), 教員による演奏, 近隣園の園児による演目, 音楽演奏を取り入れた演劇「スイミーと海の仲間たち」
第3回	2009	「オズの魔法使い」をアレンジした演劇に楽器演奏やダンスを挿入した音楽劇, 近隣3園の園児による演目
第4回	2010	「不思議の国のアリス」をアレンジした演劇に楽器演奏やダンスを挿入した音楽劇, 近隣3園の園児による演目
第5回	2011	オリジナル劇「サンタさんからの贈り物」
第6回	2012	オリジナル劇「かいじゅうたちが教えてくれたこと」
第7回	2013	オリジナル劇「ルーシーとまほうのくに」
第8回	2014	オリジナル劇「夢をととりもどせ! ~選ばれし4人のだいほうけん~」
第9回	2015	オリジナル劇「キャシーのだいほうけん~ベルのうたごえをととりもどそう~」
第10回	2016	オリジナル劇「ヒーローになりたい~四つの世界へだいほうけん~」
第11回	2017	オリジナル劇「なつきのだいほうけん~みんなのゆめをととりもどせ~」
第12回	2018	オリジナル劇「おおかみはともだち」
第13回	2019	オリジナル劇「うみのだいほうけん~人魚姫をすくえ!~」



図1 「総合子どもカーニバル」第1回から第13回までのパンフレットの表紙

感覚を生じさせ、半年以上先の上演まで実行委員の主体性を保持するという点で重要な役割を果たしていると考えられる。

## 2-2. 脚本作り

実行委員会における脚本担当者は、例年1名ないしは複数名が名乗り出る。脚本を担当したいという動機や経験の度合いはそれぞれである。先述のように、年度はじめの実行委員会において、徐々にキーワードやコンセプト、メッセージ性が議論され始めるタイミングで、脚本担当者はそこで示された内容を手がかりに脚本のイメージを膨らませていく。登場人物を決め、大まかなストーリーを構想し、毎週の実行委員会に提示し、他のメンバーから出される意見や話し合いをふまえて加筆修正を繰り返しながら作品を書き進めていく。この段階においては、脚本担当者と脚本作りをサポートする教員の間できめ細かなやりとりが必要となる。登場人物の設定、場面の設定、物語の伏線や展開、美術や演出のアイデア等、脚本担当者と教員、実行委員会での共有とすり合わせを積み重ねながら、脚本は後期授業が始まるまでに完成させなければならない。そして後期授業開始後は、舞台に係る何らかの問題が生じた際、実行委員会の中で脚本担当者や演出担当の学生に持ち込まれ、教員とも相談しながら解決を図る。学生たちは、担当グループ内で解決可能な問題であるのか、他の部門とのやりとりによって解決すべき問題なのか、それとも教員やリーダー役の学生に舞台全体を考慮した判断を仰ぐべきなのかについて判断しながら、問題解決に当たらなければならない。実際の授業運営の全体像や授業における連携のあり方については、次章を参照されたい。

## 3 「総合子どもカーニバル」の授業構成と様々な連携

本章では、授業担当者として「総合子どもカーニバル」の完成に向けてどのように授業を進めてきたのかを具体的に示す。本章第1節では、授業の中での総合子どもカーニバルの構成について概要を説明したのち、2019年度の例をあげて詳細を述べる。第2節では学生と教員の連携、教員間（授業間）の連携、教員と事務職員、および学年間の連携について示し、連携の意義について論じる。

### 3-1. 「総合子どもカーニバル」実施のための授業の進め方

総合子ども学科創立の2007年から毎年欠かさず実施している総合子どもカーニバルは、当初「保育内容」の表現領域における学びの発表のかたちで行われており、その後「保育の表現技術Ⅱ」（保育士資格のための必修授業）において展開されることとなった（なお、2020年度以降は大学の独自科目「総合表現」において実施される）。この授業は保育実習修了後の2年生後期の授業で、2年生は現場経験を経て保育・教育への自信を持ち始める時期である。なお2年生に加え1年生も、絵画・造形、体育、保育内容（音楽表現）等の成果発表として総合子どもカーニバルに参加している。1年生は、子どもたちへのプレゼントづくり、会場に置くオブジェづくり、学科ダンス、子どもと踊るダンスなどを準備し参加している。毎年終了後の1年生に対するアンケートには、子どもたちの喜ぶ顔を見た満足感と、2年生の創造的な活動への憧れや実行委員に対する尊敬の言葉、次年度への意欲が書かれている。

以下に総合子どもカーニバルの中心となる2年生の授業について詳述する。

授業の第1回目は、授業担当の各教員が「これまでの総合子どもカーニバル」「学びの意義」「生活発表会と総合子どもカーニバル」をテーマに話をしたのち、実行委員から半年をかけて計画した脚本の説明があり、脚本をもとに、履修者（約150人）がグループに分かれる。今年度の場合、グループは、ダンス、合奏、合唱、大道具、小道具、衣装の6グループである。実行委員の内10人程度がキャストとして劇活動の中心となり、他の実行委員は各グループのリーダーや全体把握を行う。授業の第2回目から練習、制作が始まり、おおむね第9回で一旦の完成となるように計画している。第10回から第12回までは舞台での稽古、第13回目がリハーサル、第14回目が本番、そして第15回目が振り返りとなっている。

本番当日は午前中にリハーサルが行われ、その後グループでの出番以外に、本番までの時間と本番中に様々な担当をこなす。担当の内容として、園への送迎バス乗車（送迎担当者は、バスの中で子どもたちに劇について話

したり、注意事項を説明したりし、降車後は会場まで安全に案内する)やバス乗り場での案内、受付、ベビーカーの管理、トイレ・授乳室の案内など細かく分かれており、それぞれが適切な行動を考えながら役割を果たす。

### 3-2. 「総合子どもカーニバル」における様々な連携

2019年度第13回までの総合子どもカーニバルはそれぞれの回において、学生実行委員と教員実行委員、教員間、学部事務課職員との連絡・協力によって進められた。回を追うごと前回の反省をもとにそれぞれの連携は強固なものになってきた。これらの連携について2019年度の例をあげながら言及する。

#### 3-2-1. 学生実行委員と教員実行委員の連携

実行委員会は毎週1回、前期中に計19回開催された。2019年度の学生実行委員は24名、教員の実行委員は11名である。教員11人は毎回の出席はできないが、教員実行委員長(筆者)は毎回ミーティングに出席し、ミーティング後に他の教員実行委員にメールでの報告を行っている。他の教員実行委員もできる限り出席し、アドバイスをし、様々な相談にのっている。後期も引き続き、週に2回のミーティングを行っている。

#### 3-2-2. 教員間(授業間)の連携

表現領域教員間では総合子どもカーニバル以外の授業でも連携を行っているが、総合子どもカーニバルでは以下のような授業連携を行っている。

○「絵画・造形Ⅰ」で総合子どもカーニバルに来演する子どもたちへのプレゼントをつくる(写真3, 4, 5)



写真3



写真4



写真5

○「絵画・造形Ⅱ」で会場ロビーに飾るオブジェを作る(写真6, 7, 8)



写真6



写真7



写真8

○「体育Ⅰ」で学科ダンス等を練習する

○「器楽・声楽Ⅱ」で学科ダンスと同時に歌う学科歌の練習をする

これら各領域授業の進捗は相互に報告し合ってすすめている。

#### 3-2-3. 教員と学部事務課職員、学生との連携

総合子どもカーニバルは学科行事として予算計上しており、その予算は、舞台美術、衣装、小道具、プレゼントの制作のほか、チラシ・パンフレットの印刷などに充てられる。

地域の保育園・幼稚園・小学校等への招待状、および学生保護者への招待状の発送は事務職員と学生で行っている。こうした事務手続きについては、教員と事務職員とでミーティングを行い計画的に進めている。

#### 3-2-4. その他の連携

学生間の学年を超えた連携も少なからずみられる。ここ数年は、前年の学生実行委員長から、詳細な記録やノ

ートが引き継がれている。教員は引継ぎを強制していないが、ノートにはリーダーとして自身が直面した様々な困難とその打開策が書き込まれ、次年へのアドバイスも書かれている。また練習後半やりハーサルを先輩実行委員が訪ね、アドバイスをすることも恒例となっている。そのほか第1節で言及したように、1年生と2年生が一同に集うことで学科の縦のつながりがみられるようになっている。こうした学年を超えた関係性は、「総合子どもカーニバル」の大きな特徴の一つであり、今後これらの連携を広げて学科全体の行事となっていくよう進めていきたいと考えている。

上記の取り組みにおいては様々な困難な点はあるが、それぞれの工夫や連携があって総合的な成果を得ているということが言える。学科成員の熱意や創造の集積が引き継がれていることで、総合子どもカーニバルの継続と進化が実現していると考えられる。

#### 4 「総合子どもカーニバル」実践分析と考察

学生はそれぞれの役割に応じて、その責任を自覚し、達成感を味わうことができたことがうかがえる。しかし、それは、指導者の経験値を通じて感じ取ることができるものであり、学生の成長の実相をとらえているとは言いきれない。そこで、本章では、2018年度の実行委員の事後のアンケートをもとにして、学生が成長していく実相の一端を明らかにしたいと考えた。

##### 4-1. 分析方法

分析方法として、質的分析の SCAT 分析を活用した。

「この手法では、観察記録や面接記録などの言語データをセグメント化し、そのそれぞれに、〈1〉データの中の注目すべき語句、〈2〉テキスト中の語句の言い換え、〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容、〈4〉構成概念の順にコードを考案して、付していく4ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論記述をする手続きとからなる分析方法である。」<sup>3)</sup>

なお、小規模なデータから確定的・一般的な理論を導き出すことは困難であり、このデータから言える範囲であることとして論を進めていくこととする。

分析結果は表2に示した。

SCAT 分析では次の理論記述を得ることができた。

○「学生は、表現の技術高まりにより、表現活動の楽しさを実感できる。」

○「総合子どもカーニバルの取り組みは、学生の自己有能感を高め、保育への意欲を向上させる。」

表2 総合子どもカーニバル実行委員の事後のアンケートからの SCAT 分析

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容	〈4〉テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)
1	学生 A	こどもは変化のあるものが好きということを学びました。子供が喜ぶような創作活動を行うときは、このことを頭に入れ、取り組んでいきたいと思います。また、子どもたちにこのカーニバルのようなことをさせるときには、子どもたちの自主性を大切にしていきたいです。子どもたちの自主性を起こさせるために促すことができるような関わり方を学んでいきたいと思っています。子どもたちには、やらされると思わせたくないと思います。	こどもは変化のあるものが好き 自主性 自主性を起こさせるために促すことができる関わり方	場面の変化 自分からやりたいと思う気持ち 支援の方法	好奇心 楽しさ体験 保育の表現	子どもの好奇心を生かし、子どもが楽しさ体験を経験できる表現活動の工夫
2	学生 B	みんなでそろえるまでの大変さを学びました。よって、細かく区切って練習することや、子どもが飽きてしまわないような練習方法を考えようと思いました。また、練習が大変でも本番が終わった後の達成感はずいぶんいいので、子どもたちにも、その達成感を味わってほしいです。保育者が楽しんでいると子どもたちも自然に楽しんでくれると思うので、笑顔で楽しみながらやりたいと思います。	みんなでそろえるまでの大変さ 達成感 保育者が楽しんでいると子どもたちも自然に楽しんでくれると思う	動きを習得するまでの苦労 楽しい練習方法 できる楽しさ 指導者と子どもとの楽しさの共有	習得までの困難さ 目標の明確さ 達成感 一体感	表現技能習得するまでの課題を克服する過程での成果

3	学生 C	グループで何かをやることを伝えていきたいです。そして、その時の一人一人の意見を尊重し、大切にしていけることが大切だと思います。しかし、なかなか難しいことなので、そこで保育者は考えて子どもたちに接していかなければならないと思います。また、ダンスの楽しさも子どもたちに伝えて、体をリズムに合わせることを知ってもらいたいと思います。また、ダンスの楽しさも子どもたちに伝えて、体をリズムに合わせることを知ってもらいたいと思います。	一人一人の意見を尊重し、大切にしていけること ダンスの楽しさも子どもたちに伝えて、体をリズムに合わせることを知ってもらいたいと思います	子どもの思いを生かすこと リズム感の習得	相互理解(学生同士) 音楽との一体感	表現活動の目的の明確性、関係者の一体感による達成感
4	学生 D	保育者が子どもたちに楽しんでもらえるようにしなければならぬことは、一所懸命楽しむことだと思います。ビデオを見ていて、子どもが真似をしていた場面などをみると、保育者は子どもにとっての見本なんだと感じました。そして、子どもたちには挑戦する心をもってもらえないように、保育者から何事も進んで行わなければならないと思うので、子どもたちに悪影響を与えないように、笑顔で楽しんで成長を見届けてあげたいです。	一所懸命楽しむこと 保育者は子どもにとっての見本 子どもたちには挑戦する心をもってもらえないように、保育者から何事も進んで行わなければならない 笑顔で楽しんで成長を見届けてあげたい	楽しさ体験 子どもへの模範なんだ 保育者が率先する 有能感を持てるように	達成感 保育者が楽しめること 子どもに伝えるもの 子どもへの支援	保育者の自発的な支援による子どもの自尊心の育成
5	学生 F	子どもの事を一番考えて、全力で取り組む大切さを、先生、先輩を見ていて思いました。どんな大変だったことも成功すれば、良い思い出になると実感しました。みんなで楽しくなるような工夫とコミュニケーションの大切さを知ることができた、良い機会でした。ここで学んだことを子どもたちの発表会などを考える際にいかしていきたいです。	子どもの事を一番考えて、全力で取り組む大切さを、先生、先輩を見ていて思いました。どんな大変だったことも成功すれば、良い思い出になると実感しました。 楽しくなるような工夫とコミュニケーションの大切さ	先輩の取り組みの様子 課題克服 指導・支援の工夫	指導の継続性 達成感 子どもの成長	子どもが取り組み通じて学ぶ内容 子どもを支える意義
6	学生 G	子どもカーニバルの映像を見て、他のグループはダンスが楽しそうで、上手く工夫して頑張っていた。お花ダンスでのパラバルーンはどのようにするか悩み苦しんでいたけど、とてもきれいにパラバルーンができていたのよかった。なので、子どもたちも一緒に楽しめるようなカーニバルを作成できるように指導したい。	ダンスが楽しそうで、上手く工夫して頑張っていた 子どもたちも一緒に楽しめるようなカーニバル	子どもの主体性 子どもの喜び	指導の工夫 他者との関わり	取り組みへの意欲 作り上げる喜び
7	学生 H	総合子どもカーニバルは保育士や幼稚園の先生になる上で、チームワークや想像力や行動力など必要な力を身に付けさせてくれました。各チームで話し合いながら、どんな作品にすれば子どもが喜んでくれるかなどを考えることもできました。行動力の面ではわからないところやチームで合わせるときに発揮できるので、園での発表会や運動会など全てに生かしていける力なので生かしていきたいです。	チームワークや想像力や行動力など必要な力を身に付けさせてくれました	取り組みへの要因の獲得	指導者・子どもの双方の成長	ともに成長する実感
8	学生 I	協力して作品を作る時に、アイデアを出したり、配役の決め方など、周りの意見をしっかりと聞き努力することの大切さを前面に出せる保育者になりたい。子どもが劇をする際には、子どもの意見をしっかりと聞くことを心がけようと思った。体を動かすことや、音楽に乗って、ダンスをすることの楽しさを教えられるようにしたい。ダンスなど、見ている側が心から楽しめるように、どのようにしていくかを助言できるようになったと思う。体で表現することの楽しさを教えたいと思う。	周りの意見をしっかりと聞き、努力することの大切さ 体を動かすことや、音楽に乗って、ダンスをすることの楽しさ 見ている側が心から楽しめるように、どのようにしていくかを助言できるようになったと思う	協調性 リズム感 子どもへの支援	相互理解(学生同士) 動きとの意識の統一感	取り組みへの意欲の高まり 音楽や仲間との一体感
9	学生 J	私はこのカーニバルを通して学んだ。みんなで何かをつくりあげることが、一人でつくりあげることよりも大変だけど、完成した時の喜びや達成感をもっと大きくなるということ子どもたちにも教えてあげたいと思った。そして、体で表現する楽しさを子どもたちに教えてあげたいし、体育の時間などに生かしていきたいと思った。	みんなで何かをつくりあげることとは、一人でつくりあげることよりも大変だけど、完成した時の喜びや達成感をもっと大きくなる 体で表現する楽しさを子どもたちに教えてあげたい	取り組みの課題の克服 完成時の喜び リズムの体感	意欲の向上 協働性 仲間との統一感	取り組みへの意識の高まりによりともに成長
10	学生 K	声の出し方や表現の仕方の基本的な技術を身に付けて子どもたちに教えてあげたい。それによって、子どもたちに実現する楽しさを教えてあげられるといいと思う。他の人や動物、物になりきること、その対象から人生のヒントを見つけることもできるかもしれない。	声の出し方や表現の仕方の基本的な技術 子どもたちに実現する楽しさを教えてあげられるといいと思う 人生のヒント	保育の表現の技能 表現の技術 生き方へのヒント	子どもを高める教育技術 教育者としての向上心 自分の生き方を示す	子どもを高める意識 自分の生き方
ストーリー・ライン		総合子どもカーニバルの取り組みを通して、学生は表現の技術を高め、子どもの感動する様子から客席との一体感を感じることができた。 学生は、学生同士のつながり、子どもとのつながりを感じ取り、保育者としての喜びや自己有能感を高めることができた。				
理論記述		学生は、表現の技術を高まりにより、表現活動の楽しさを実感できる。 総合子どもカーニバルの取り組みは、学生の自己有能感を高め、保育への意欲を向上させる。				
さらに追究すべき点・課題		次年度以降、カリキュラム上、受講しない学生との差が生じるのではないかと(取り組みの成果を早い段階で1年生に伝える必要がある) 更に成果を発表する機会を増やすため2回公演などの方策の検討が必要ではないか				



さらに、10名（実行委員）のアンケートデータから「総合子どもカーニバルの活動」の過程における学生の思考や、学生に影響を与えているものなどを整理するため、SCAT分析から得られたテーマ・構成概念を意味のあるまとまりで切片化し、共通するものをまとめて抽象度を高めたカテゴリーグループを生成、さらに抽象度を高めたコアカテゴリーを生成した。

その結果は、以下の通りである（表3）。

表3 カテゴリー分析によるコアカテゴリー生成

コアカテゴリー	カテゴリー	キーワード	対象者
活動の意義	活動を通じて導き出される価値	楽しさ体験 表現活動の目的 関係者の一体感 達成感 作り上げる喜び 音楽との一体感 仲間との一体感 子どもの好奇心	学生 A 学生 D 学生 C 学生 E 学生 G 学生 I 学生 J 学生 A
	表現の巧緻性	表現活動の工夫、表現技能習得	学生 B
保育者・教育者としての意思形成	取り組みの道程	課題を克服する過程、成果	学生 C
	保育の価値	自発的な支援、子どもを支える意義、自尊心の育成 子どもを高める意識	学生 F
	意識の高揚	取り組みへの意欲、取り組みへの意欲の高まり	学生 G
	仲間同士の理解	ともに成長する実感ともに成長	学生 H

## 4.2. 考察

SCAT分析で得た理論記述とカテゴリー分析によるカテゴリーを合わせて、カテゴリー分析をもとに考察を加えることとする。

### 4.2-1. 活動の意義

発表が近づくにつれて、自分から表現の技術を身につけようとする、自分で工夫をしようとするなど、活動への意欲が高まっていく様子が示された。さらに、学生同士が、やらされるのではなく自分からやろうとする意識が高まり、達成感や喜びを感じ取っていった過程が分析結果より示された。

### 4.2-2. 保育者・教育者としての意思形成

学生は取り組みの課程で様々な課題を感じていることが示された。それは、グループの人間関係、課題に対する個人での取り組みの在り方、時間的制約など多岐にわたる。しかし、この活動では話し合いは必要不可欠なものであり、仲間同士で個人の抱える悩みや課題をやりきるための技量不足や不安、活動への意識の低さなど自分の課題を認め合い、出し合って、理解し合うことが必要となる。その過程で、協働同僚性が醸成され、学生同士で活動を支え合うことに繋がっていった。結果として、カーニバルが近づくにつれて学生の意欲が高まり、様々な葛藤を乗り越え課題を達成する相互理解がなされたと考えられる。

この取り組みは、今までの自分の殻を破って、仲間と共にやろう、精一杯やりきろうといった姿勢を身につけていく。それが可視化できる意義ある教育活動であることを、この分析から明らかにすることができた。

## 4.3. 課題

青木<sup>4)</sup>によれば、「活動構想」では、「学生の子ども理解、活動・環境・素材の経験や知識（引き出し）、学生自身の生活経験の豊かさ、学生自身の感受性、思いつき、学生自身の学びの姿勢、必要素材を工夫・調達する姿勢、公私の区分なく構想する姿勢、事例を実践に適合する力、必要な情報をストック化する姿勢といったさまざまな事柄が影響している」とされている。総合子どもカーニバルの取り組みでは、青木の「活動構想」の全ての要因が含まれている事が分かる。これらの要因は、保育者・教育者を目指す学生にとって、教育活動全般を通じて身につける必要がある内容である。よって、このカーニバルの取り組みをどのように教育活動に生かしていくか、その工夫が今後の課題であると思われる。

## 5 おわりに

本稿では、甲南女子大学総合子ども学科において2007年の創設以来13年間続けてきている総合表現プログラム「総合子どもカーニバル」の実践活動について、その枠組みと学びの実相をPBLの観点から論じ、詳述したのち、学生へのアンケート結果をもとに活動の意義を考察した。「総合子どもカーニバル」が学生にどのような影響を与えたかを明確に示すことができたかどうか言明することはできないが、数値化や明確なデータを提示することが難しい状況において、13年間の軌跡を辿り考察を加えることができたことで、これまで関わってきた学生と教員の熱意に少なからず報いることができたと思う。

2007年の総合子どもカーニバル初回において、学生実行委員は二人だった。第1回総合子どもカーニバルの内容は保育内容の授業実践の発表であって、招待する子どもたちにより良いものを聴いてもらいたい、見てもらいたいとの思いがすべてだった。その後、本学講師であった衣川久美子先生をはじめ学科授業担当の先生方、非常勤講師の先生方の指導の下、総合表現活動としての総合子どもカーニバルが年を経るごとに新たな展開をみせた。指導者の力量と学生の教育・保育への熱意、続けることの意味が総合子どもカーニバルを進化させ、その活動は将来教師・保育士となる学生たちの確かな礎となっている。加えて、毎年入試面接において、受験生が総合子どもカーニバルについて言及することも多く、学科の特色として受験生への訴求力も高い行事となっている。

総合子どもカーニバルは、年ごとに工夫が凝らされ、連携が行われ、近隣の園においても恒例の行事として楽しみにしていただけるようになっている。卒業生が近隣の園で就職し、総合子どもカーニバルに子どもたちを引率してくれることもある。今後も学生たちが子どもを思うエネルギーを集積し、学科全体の総合表現プログラムとして発展していくよう力を尽くしたいと考えている。

本稿は、1章を辻、2章を相澤、3章を坂井、4章を仲山、5章を坂井が担当し、執筆している。

### 参考文献

- 1) 文部省(1999)『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館、pp.127-128
- 2) 石山哲郎・鶴見達也(編)(2008)『幼稚園教育要領・保育所保育指針』、チャイルド社、p.63
- 3) 大谷尚(2007)「4ステップコーディングによる質的データ分析方法 SCAT の提案ー着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続きー」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学) vol.54-2 号
- 4) 青木一(2018)「保育者の「活動構想」のあり方に関する研究」大阪総合保育大学大学院博士論文、甲第17号